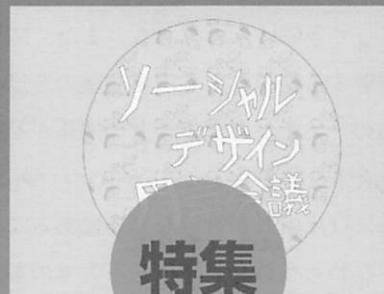


一人一人が輝く明日へ

NPOkayama

特定非営利活動法人岡山NPOセンター 機関誌



いま、地域円卓会議を考える

目 次

- Social Goodなキーワード解説vol.2 ··· 01
- リーダーメッセージ ··· 02
- 特集「なぜ今、「地域円卓会議」が重要か?」··· 03-05
- 事務支援センター便りvol.2 「健康保険・厚生年金の加入について」··· 06
- おかやま元気! 集落の声vol.2 「真庭市 上田地域」··· 07
- 石原文庫の「ななめ読み」vol.6 「エネルギー問題に効くデザイン」··· 07
- NPOリーダーの見る世界-SocialでGoodな岡山を紡ぐ人-vol.13 石田篤史さん··· 08

Social Goodなキーワード解説 vol.2

マルチステークホルダー Multi stakeholder

ある組織や物事に対する多様な利害関係者の意味です。

企業やNPO、行政等が、事業活動や運営を行う上でその影響を受ける主体のこと呼びます。事業を持続するためにそうした関係者との関係構築や対話をを行うことの重要性が言われるようになってきています。例えば、NPOで考えれば、サービスや事業の利用者、利用者の家族・親族、寄付者、会員、役員、職員、ボランティア、関係する行政機関、事業に関連する企業、物品の購入などを行う企業、金融機関、事務所を置く地域コミュニティ、近隣住民、自治体、同じテーマで活動するNPOや、同じ法人格を持つNPO法人など多様な関係者がいます。NPOの場合にはこうしたステークホルダーをどう巻き込んでいくかも重要です。また、社会責任に関する国際規格「ISO26000」の策定にあたっては、各国の産業界、労働界、行政、NPO等のマルチステークホルダーが対話を重ねてガイドラインを策定するなど、こうした捉え方が重要視されてきています。

(事業開発・地域連携担当理事 石原達也)



まちづくりと地域円卓会議

最近NPO関係者の間で円卓会議という言葉がよく聞かれるようになった。円卓会議とは円卓を用いて出席者に序列を定めない会議のことで、フラットな組織であるNPOにとっては居心地の良い会議方式である。まちづくりにNPOが活躍する場面が増えるにつれ、円卓会議の存在感が高まってきているのである。また、NPOと行政とそして企業との「協働」という概念が定着するにつれても円卓会議の登場場面が増えてきている。特にNPOと行政は従来からの「お上」と「下々」の関係が払拭され、対等な関係が志向されつつある中で円卓会議様式は重要な位置を占めつつある。

円卓会議が円卓会議であるためには出席者が対等な立場にあること、出席者がマルチステークホルダーであることすなわち多様な立場にある人々の参加があること、円状に座ることによってみんながみんなの顔を見ることができること、すなわちそれぞれの立場を知ることができる状態にあることが肝要なことである。そして何よりも大切なことは円卓会議を進める進行役のコーディネーションあるいはファシリテーションの力量である。出席者の立場を尊重して彼らの意見や考え方を引き出して議論をかみ合わせ、実りのある結論を導き出せるかどうか円卓会議の成否はひとえに進行役に懸かっているといつても過言ではない。最近コーディネーターやファシリテーターの存在価値が高まっていることは円卓会議の動向とも大いに関係のあることである。

円卓会議は単なる会議だけであってはならない。必ず実行可能な結論が導き出され、具体的な実行が伴わなければならない。特にまちづくりにあってはその地域の課題が明確になり、その課題をクリアするためには何をなさなければならないか、そのため各出席者がどのような役割分担を求められるのか明らかにされなければならない。実践例としてつい最近出版された「京都の地域力再生と協働の実践」という書物から「京都府地域力再生プラットフォーム」の取り組みを紹介したい。いわば実行のための実質円卓会議と言うことができるからである。地域力再生プラットフォームとは、自治会やNPO、大学、企業、京都府や市町村などが、共通する課題に応じて集まり、それぞれが得意とするネットワークや知恵を活かしながら地域の課題解決や新しい価値創造に向けた施策や協働事業を生み出し、実行に移していく場である。京都府では平成20年度から取り組み始め、初年度の19プラットフォームから年々着実に増えて、平成24年度には99のプラットフォームから約150もの協働事業が生まれている。岡山県でも参考にしたいものである。

(代表理事 米良重徳)

なぜ今、「地域円卓会議」が重要なか？

Roud table conference

円卓会議とは、社会、文化、生活、経済など、様々な分野における地域の多様な立場の人々が、地域課題解決を目指してアイデアを持ち寄り、完全に対等な立場で意見交換をする場のことです。政府主導ではもちろん、それぞれの担い手の単独の取り組みでは、必ずしも十分な成果を挙げることができない諸課題を「協働の力」で解決する場づくりの芽が、国内でも芽生え始めています。円卓会議は、課題解決のための根源的な力である「人のつながり」という社会资本形成の一端を担う仕組みとも言い換えられます。

分野を超えた日常的な連携が、新しい課題の解決のために不可欠。



地域円卓会議のポイント

I 各ステークホルダーによる協働

地域円卓会議は、事業者団体や消費者団体、労働組合、行政、そしてNPO・NGOなど、各ステークホルダーが合意することにより協働で設置された、新しい枠組みです。

II 地域社会の課題解決に向けた、対話のためのツール

円卓会議では、政府も含めすべてのステークホルダーが当事者として対等な立場で参加します。政府が設置する通常の有識者会議や審議会などでは、予め設定された議題に対し有識者が提言を行い、その成果は主に政府の政策に生かされます。そこでは、政府以外のステークホルダーは、あくまで政策の客体に過ぎません。政府が議題設定を行うのではなく、担い手それぞれが課題を提起し、協働の力による解決方法や自らの役割について議論します。

扱う議題も参加者が話し合って決定し、すべてのステークホルダーのアクションが議論の対象になります。

III 円卓会議により、市民社会を広げる

人には国民、組織の一員、組織に縛られない一市民としての顔があります。社会も、国家、組織社会の他に「市民社会」の領域が存在しています。また、組織を守るために作られた規制が、新たなアイディアを実現する上での障壁になることもあります。組織社会の一員としては、問題が分かっていても行動しにくいものです。立場を超えて参加でき、自由な討議や協働の実験ができる場をつくるのもNPOや市民団体に求められる役割のひとつです。制度や利害に縛られずに、地域の主体に呼びかけることもできます。地域の主体の参画の場を拓げることが、時代の流れと共にNPOをはじめとした中間支援組織に求められています。

円卓会議は、組織間で利害調整をする場というよりは、組織を超えた議論ができるところに価値があります。単独では実現困難なアイディアを互いに持ち寄って、協力できることを実験する。そこで生まれた発想を自分が属する組織に持ち込むことをしていけば、組織社会が生み出す弊害も改善されていきます。国内におけるその取組のテーマも、介護や子育て、地球温暖化や地域防災についてなど、地域の実情に即して多岐に渡っています。

以上のように、円卓会議は、対等な参加に重点を置いた「新しい社会的構成のモデル」を提示しています。円卓会議での経験を通じて、こうした新しいモデルが地域や国など各レベルで定着し、様々な社会的課題の解決に応用されることが期待されます。

NPO制度も、地域円卓会議も、「市民が主役になる市民社会」を豊かにするための仕組みです。

これらをうまく活用し、自ら住み良い社会をつくっていきましょう。

[特集]

岡山県新しい公共支援事業 成果報告会「ソーシャルデザイン円卓会議」開催！

「地域円卓会議」の全国展開が進む中、岡山県内でも初めて地域円卓会議が開催されました。

NPO法人岡山NPOセンターでは、平成23年度～24年度に渡って開催された「岡山県新しい公共支援事業」の成果報告会を岡山県より委託を受けて開催しました。

今回の報告会は趣向を凝らし、参加者も一緒に議論を行う「地域円卓会議」の形式で開催。

2013年7月・8月に開かれた、「ソーシャルデザイン円卓会議」のご報告です。



事例① 「ソーシャルデザイン円卓会議」 in 県南

2013年7月7日、これからの地域デザインについて考える「ソーシャルデザイン円卓会議」が開催されました。

10名の円卓会議着席者のほか約60名の市民が集まり、地域の課題解決に向けた取り組みについての意見交換を行いました。

●円卓会議着席者（順不同）

- ・瀬戸内市 副市長
- ・玉島信用金庫
- ・山陽新聞社

※以下、新しい公共モデル事業実施者・報告者のみなさん

- ・京山駅西アクティブルチャーゾーン事業
- ・井原デニムによる地域活性化事業
- ・笠岡市子育て・子育ちセーフティーネット構築事業
- ・「DONATION（どねーしょん）くらしき」事業

●コーディネーター

石田篤史さん（一般財団法人 みんなでつくる財団おかやま 代表理事）



鈴木さん

基調講演

「東北初の市民コミュニティー財団として地域の変革者のリソースに～復興と、復興にとどまらない次のくらしの創造へ～」
鈴木祐司さん（一般財団法人 地域創造基金みやぎ 常務理事）

東日本大震災直後の財団設立の経緯や目的、具体的な事業内容や今後の展望についてお話しいただきました。未曾有の自然災害により、それまでゆっくりと進行していた地域の課題に対して、一気に「緊急課題」として対処せざるを得なくなった東北の取り組みの数々は、岡山県での取り組みにおいても先行事例として示唆に富むものであるといえます。

話題提供 + 円卓会議形式のディスカッション 「これからのオカヤマをどうデザインしていくか？」

「各地ではじまるソーシャルデザイナーたちの動き」 小野裕之さん（ウェブマガジン「greenz.jp」副編集長）

ゲストのNPO法人グリーンズ理事 小野裕之氏により、日本各地でのソーシャルデザイナーによる社会課題解決のための取り組みをご紹介いただき、各地の事例から見えてくる共通の傾向として、以下の点が提示されました。

「活動が繋がっていけば、一石二鳥三鳥と成果は広がっていき、少ないアクションで解決できることの範囲が大きくなってくる」

「『日常』をブランド化して、新しいキーワードで価値を高める」

「都市部の課題に、地方のコミュニティーでは当たり前の仕組みからアプローチする」

来場者はグループに分かれ、全国での事例から感じたことを、自由にディスカッション。会場からは、「日常の中にあるアイデアに気付くこと」「活動を持続可能にするには、楽しさや共感が不可欠」といった意見が交わされました。



小野さん

次ページへ続く

さいごに

さらにコーディネーターの一般財団法人みんなでつくる財団おかやま代表理事 石田篤史氏の司会により、岡山でのこれからの新しい公共を進めるためのキーワードを、いくつかの質問に従って着席者より提案していただきました。その結果、「地域の魅力の共有」「面白いこと」「仲間を増やす」「場所づくり」などが挙がり、地域と人のネットワークを重視する内容が多数を占めました。

最後に、地域創造基金みやぎ鈴木祐司氏により、岡山の現状への総括をお話しいただきました。

「岡山は元来公民館活動などの地域の力が強く、交通の要衝でもあり、地域の取り組みがしっかりと育ってきている。様々な地域活動の背景には、多くの人々の尽力や気持ちがある。今後は、声も上げられない本当に困っている人の声を吸い上げ、当事者が集まって解決できるよう支援していくことが新たなチャレンジになる」

事例② 「ソーシャルデザイン円卓会議」 in県北

中山間地域の課題解決の取り組み報告とこれからに向けての議論！

●話題提供者 小西威史氏 月間「ソトコト」編集部 副編集長

●着席者 テレビせとうち株式会社

●着席者・事業報告者

赤磐市市民活動応援プロジェクト

エコビレッジあば推進事業

買い物助け合いプロジェクト

市民と企業でつくる「真庭の森づくり」プロジェクト

農“福”商工連携 de MATAGI プロジェクト

備前子育て楽園ひろば支援事業

●コーディネーター

石田篤史さん（一般財団法人 みんなでつくる財団おかやま 代表理事）



岡山県の7割の面積を占める「中山間地域」の課題解決に関する取り組みを実施された事業者を県内各地からお招きし、今後の中山間地域での暮らしについてのソーシャルデザインを考える参加型の円卓会議を開催しました。

来場者を含めて、「これからのおかやま元気！集落の声」というテーマでフリップディスカッション。着席者と来場者含め課題を分かち合い、テーマやアイデアへの共感度が高まる場となりました。

「新しい公共」は、NPO、行政、企業など多様な主体が支え合いながら、きめ細やかな社会サービスの提供を目指すものです。この「新しい公共」を長期的な視点で進めていくため、地域の各ステークホルダーに求められる役割や「新しい公共」を支える人材、資金、情報等の資源のあり方などについて考えることは不可欠です。岡山における2度の地域円卓会議をもって、「市民が、円卓会議という仕組みを通じて、新しい公共を担うことが出来る」可能性が拓がりを見せることとなりました。多様な組織や多くの市民、県民が参加し、協働することを通じて、責任ある行動や選択が生まれる場を共に育てて参りましょう。

「沖縄式 地域円卓会議 開催マニュアル」

本書には、テーマの定め方から、企画手順やコツ、意識の共有方法まで、円卓会議開催への道標が細部に渡り記されています。円卓会議は対話のためのツールであり、本マニュアルには「ツール活用のためのツール」と言うにふさわしい知恵が詰まっています。

ぜひ活用して、地域での新しい協働をつくり出していただければと思います。

地域円卓会議開催をお考えの方、ご関心をお持ちの方、ぜひお手に取ってご一読ください。

冊子のご購入については、インターネットからもお申込みいただけます。

編集・発行／公益財団法人みらいファンド沖縄 http://miraifund.org/?page_id=6675
市民社会を支える地域資源の循環をめざし、NPOを支援する財団法人です。



(事務局員 岩崎春加／ボランティア 岩崎多栄子)

「健康保険・厚生年金の加入について」



多くの法人の皆さんは、通常総会も終わり日頃の活動に力を発揮されている頃だと思います。さて今回は健康保険・厚生年金の加入手続きについてご案内します。

法人事業所で**常時従業員**（事業主のみの場合を含む）を使用する場合、法律で厚生年金保険及び健康保険の加入が**義務づけられています**。

つまり、事務局に**常勤の人が1人でもいれば**、健康保険・厚生年金に加入しなければなりません。**常勤とは、事業所の所定労働時間を通じて勤務する労働形態のこと**、です。これに対し、所定労働時間のうち一部を勤務する形態を**非常勤、パートタイムといいます**。

事業所の所定労働時間が何時間かは問われていません。通常、1日8時間とか7時間だと思いますが、極端な話、所定労働時間が4時間なら1日4時間勤務でも健康保険・厚生年金に加入しなければいけないことになります。

また、**非常勤**であっても以下の要件を満たしていれば、加入しなければなりません。

1. 1日又は1週間の労働時間が常勤者の概ね3/4以上であること。
2. 1ヶ月の労働日数が正社員の常勤者の概ね3/4以上であること。

つまり、常勤者が1日8時間働いているのであれば、非常勤者が1日6時間働けば健康保険・厚生年金に加入しなければなりません。また、非常勤者の夫が健康保険・厚生年金に加入している場合、労働時間・収入により非常勤者の健康保険・厚生年金は次のようになります。

	健康保険	厚生年金
労働時間・労働日数ともに3/4以上	非常勤者自身が健康保険に加入	非常勤者自身が厚生年金に加入
労働時間3/4未満 かつ年収130万円未満	非常勤者の夫の健康保険の被扶養者	国民年金の第3号被保険者
労働時間3/4未満 かつ年収130万円以上	非常勤者自身が国民健康保険に加入	非常勤者自身が国民年金の第1号被保険者として加入

加入しなければならないのに加入していなかった場合、過去にさかのぼって保険料の支払いを請求されます。請求された保険料については、必ず支払わなければなりません。

加入の必要があるかどうかは、管轄の年金事務所にお問い合わせください。

また、「雇用保険」も1週間の所定労働時間が20時間以上で31日以上雇用される見込みがある場合は、雇用保険の加入をしなければなりません。また、週40時間の労働時間で契約している場合は、31日以上雇用される見込がなくとも雇用保険の加入対象者となります。あわせて再度ご確認ください。

なお、岡山NPOセンターでは「事務支援センター事業」（有料）で相談に対応しています。苦手なこと、心配なこと、何でもまずはご相談ください。（☎086-224-0995 担当：加藤・國安まで）

（事務局 加藤彰子）

連載：「おかやま元気！集落」の声 vol.2

岡山県の中山間地域の視点から

～真庭市上田地域を盛り上げるキーパーソン～

中山間地域のいま

現在、過疎化・高齢化が進行する、中山間地域と呼ばれる集落が増加し、耕作放棄地の増加や、公共交通手段の喪失など様々な問題が顕れています。岡山県では、単独では集落機能の維持が困難な地域のうち、「地域内連携のもと、集落機能の維持・強化に取り組む地域」を市町村からの推薦により「おかやま元気！集落」として登録する制度を設けています。本特集では、県内の「おかやま元気！集落」として活動されているキーパーソンの声を紹介します。

今回は、真庭市南部の中山間地域に位置する真庭市上田地域の西田文子さんにお話を伺いました。



■ 真庭市「上田地域」について教えていただけますか？

私は22年前に上田に嫁いできて、その当初から地域の行事に参加してきました。村おこしが始まったのは平成7年です。最初は桜と紅葉祭りしかありませんでしたが、あじさい祭りなど、お客様の声でお祭りが増えてきています。

10年くらい前まで、今80歳くらいの人が70歳くらいの頃は、「なんて活発な地域なんだろう」と思うような、まとまりのいい地域でした。声をかけると皆出てきて、運動会や文化祭には150人以上は集まっていました。文化祭では地域の人たちが次々ステージに上がって歌や踊りや演劇を披露して、それを地域の人たちが見るんです。でも、今は外部の人を呼んできて、それを観賞するだけになってしまっています。

■ そんな中、「おかやま元気！集落」に指定されたのですね。

おかやま元気！集落への指定は、真庭市役所から「上田地域は頑張っておられるので援助させていただきますがいかがですか？」と打診を受けて、岡山県から指定していただきました。

そんな経緯を経て、岡山NPOセンターが展開する、集落へボランティアを送る仕組み「おかやま元気！集落応援団」のことを知り、皆さんの実になることをしなければと思い、おかやま元気！集落3年目にして初めて応援団をお願いしました。

■ 「おかやま元気！集落応援団」はいかがでしたか？

来ていただいた本当によかったです。経験のない方ばかりだったにも関わらず、皆さん意欲的にコミュニケーションもとりやすい方で、地域のお年寄りともいろいろ会話をされていました。地域の皆さんの表情が生き生きしました。とにかく、イベント中の舞台裏は目まぐるしい状況です。それが、応援団員が来てくれただけで穏やかになり、あとで「よかった」という声が多く聴こえました。それをきっかけに、皆さんとのつながりもできましたし、また、ぜひ来て欲しいです。

■ 今後、どのように地域活動を展開していくされますか？

耕作放棄地に地域の特産品の「ごぼう」を植えてみたいです。応援団の皆さんも参加されて地域住民と上田地域を愛する外の応援団の方と一緒に、地域を活性化していきたいです。

おかやま元気！集落とキーパーソンの紹介



【西田文子さん】

上田むらおこしの会の会計を担当。

地域のお祭りの企画、準備、運営などに楽しんで取り組み、活気のある村づくりに尽力している。

【真庭市 上田地域】

秋に咲く桜と紅葉の美しさ、四季折々の花まつりを運営する村人達の会。

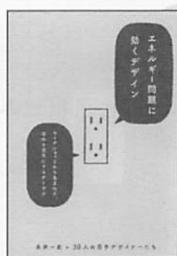
そば、きびもち、ごんぼうみそ、たかきびぜんざいなど、上田地域ならではの味作りにこだわりながら、「訪れてよかった！」と喜んでもらえる温かい村づくりに力を注いでいます。(事務局員 浦上茂久)

[岡山NPOセンターセレクト]

石原文庫の「ななめ読み」vol. 6

石原文庫とは？

岡山NPOセンターの事業開発・地域連携担当理事の石原が個人的に収集した書籍を集めた本棚です。



エネルギー問題に効くデザイン

(永井一史 + 30人の若手デザイナーたち、誠文堂新光社、2012)

本書は、電力に限らず様々なエネルギー消費を削減するため、30人の若手デザイナーによるアイデアを紹介しています。既存のプロダクトにひと工夫を加えたものもあれば、全く新しいものを作り出す企画もあり、中には今すぐにでも実現できそうなものも。

柔軟な発想によるアイデアは、単なる閃きではなく、思考のプロセスを経て練りに練って形にされるのだそう。共通するのは、課題をデザインにより目に見える形にして、消費者の意識をエネルギー問題に向けてもらうこと。そういう基準でのものづくりが増えていくといいと思います。

第13回

一般財団法人 みんなでつくる財団おかやま
代表理事・石田篤史さんに聞く

「全員で課題解決めざす円卓会議」

「みんなとやればできるはず！」を合言葉に、地域円卓会議を取り組みの一つと位置付けている一般財団法人「みんなでつくる財団おかやま」。代表理事の石田篤史さんに、円卓会議に込める思いやその手法、また岡山での実績や今後の可能性について話を聞いた。
(聞き手：岡山NPOセンター理事・鈴木富美子)

一 石田さんの考える円卓会議とは？

社会のいろんな課題を、いろんな立場の人が、まさに円卓を囲むかのように全員参加で解決をめざそうという会議です。

従来の会議、例えばシンポジウムなどの場合、参加した人はステージ上の人たちの意見を一方的に聞かされて終わり、というイメージ。それに対して円卓会議では、会議に参加した全員が課題にかかわる当事者であり、かつ課題解決のためのプレイヤーでもある。意見を言う人、聞く人、実行する人といった線引きも、上下関係もありません。

一 その具体的な手法とは？

課題のテーマとなるべく絞り込んで、例えば「目の前にいるこの人を助けましょう」というテーマに対して、職種や利害関係の異なるいろんな立場の人が、「私ならこれができる」「Aさんはあれができる」「Bさんならこれもできる」などと、役割を加算していくような手法がまず一つ。これは、従来の会議がやることを決めて役割分担をしていくのと逆ですね。

それともう一つは、課題に対して当事者とまでは意識していない参加者に対しても、線引きなく参加してもらうことで“共感”を広げていく手法。この二つが挙げられます。

一 岡山での実績は？

今年6月、海ゴミをテーマに初開催し、7、8月とソーシャルデザイン円卓会議を開きました。また現在「町の賑わいを創出したい」というテーマでオファーがあり、町があるべきか参加者にイメージを出してもらい、それを具体的な形に落とし込んでいくような会議を企画しているところです。

一 円卓会議の今後の可能性は？

課題に対して調査や数値化もし、対話をより深めていくことで共感を広げていくことができるし、課題解決に向けての具体的な取り組みが加速する可能性があると思います。

お互い多様性を認め合いながらも立場の違いを乗り越え、参加者全員が当事者でありプレイヤーでもあることをめざしたい。当財団としては、課題があればそれを可視化し発議できる場としての円卓会議を、これからもコンスタンントに開いていきたいですね。

【一般財団法人 みんなでつくる財団おかやま】

2012年(平成24年)設立。岡山県内約100名の若者による“呼びかけ人”が中心となり、広く市民に基本財産の寄附を呼びかけ、530名より集まった4,133,000円をもとに設立した財団法人。「つなぐ、つたえる、シェアをする」をキーワードに、安心で持続可能な地域社会の実現をめざし、事業指定寄附、冠基金、円卓会議などの事業を展開する。



【石田篤史さん】

1977年、倉敷市生まれ。立命館大学理工学部卒業後、岡山県庁土木部に勤務。2012年3月、県庁を退職し、5月NPO法人「岡山NPOセンター」職員に。同年9月、みんなでつくる財団発足と同時に代表理事就任。2児の父。

● 制作・発行

特定非営利活動法人 岡山NPOセンター

<http://www.npokayama.org/>

発行人 米良重徳（代表理事）

編集責任者 鈴木富美子（理事）

発行日 2013年9月10日

● お問合せ先（事務局）

〒700-0822 岡山市北区表町1丁目4-64 上之町ビル3階

TEL 086-224-0995 FAX 086-224-0997

E-mail npokayama@gmail.com

URL <http://www.npokayama.org/>

受付時間 月曜日～金曜日 9:00～17:00